

英語教育における「実用性」について

—高校英語教育の現場から見て—

青 山 米 蔵

その1 平泉試案一問題の提起

その2 「役に立つ」ということの意味

- a 「役に立つ」とは「実用になる」ことである。
- b 「役に立つ」とは「教養を深め、人間形成に役立つ」ことである。
- c 「役に立つ」とは「基礎力を身につける」ことである。

その3 英語教育が「実用的」でなくなる理由

- a 日本人が英語に弱い理由。
- b 受験英語の問題。

その4 平泉試案と実用英語について考える

- a 平泉試案と英語無用論
- b 学校教育と実用英語

その5 私の体験

その6 むすび—私の夢

その1 平泉試案一問題の提起

自由民主党参議院議員平泉渉氏は、自民党の国際文化交流特別委員会にたいする提言として、昭和49年4月18日、「外国語教育の現状と改革」と題する試案を発表されたが、今年（50年）になってから英語教育界の関心をあつめ、それに対する賛否両論がたたかわされています。その要旨は、次のとおりです。

1. 中学・高校・大学と長い時間と少なからぬ労力を費やしても、外国語は、ほとんど読めず、書けず、わからないのが実情である。
2. 中学では外国語を廃止して、世界の言葉や文化を広く教える別の教科に代える。
3. 高校では、外国語教育を行なう課程と、そうでないものに分ける。
4. 高校・大学の入試に外国語を課さない。
5. 外国語能力に関する検定制度を実施する。
6. 国民の5%が外国語（おもに英語）の実際的能力をもつことが望ましい。

また試案とはべつに、産業界からも、しばしばわが国の英語教育について「英語は高校・大学進学のための受験英語であり、実際に役に立たない。大学を卒業しても、会話はもちろん満足な手紙も書けない」という非難がなされてきました。それでは英語が「役に立つ」か否かを判断するのに何を基準にするのか—たとえば、日常会話、通信文をこなせれば「役に立つ」というのか、それとも、もっと深い意味を求めているのか—について考えてみたいと思います。

その2 「役に立つ」ということの意味

外国語（英語）の学習が「役に立つ」かどうか判定する基準（根拠）についての、いくつかの考え方を整理すると3つになるようです。以下順を追って先輩諸先生方のご意見を紹介いたしましょう。

a. 「役に立つ」とは「実用になる」ことである。

「戦後の英語教育の、もっともいちじるしい特徴は、読む英語から話す英語への転身の努力であった。勿論これは戦後の状況がそうさせたことによる。しかしこの転身があまりうまく行っていないことは、街の英語学校の繁盛によっても明らかである。街の英語学校は、終戦時まっさきに出来たが、いまでもその勢いはやんでいないようである。またテレビ・英語放送における英語タレントの流行もある。それらを一括して街の英語と呼ぶならば、その隆盛は学校英語に対する不信

であり、反発の無言の実行の姿にほかならない。戦後わが国は、いろんな点で新しく変わったが、英語教師だけはその進歩についていけない。したがって学校に期待できないから、テレビ、ラジオの講座にワラをもつかむ気持ちですが、街の英語学校へ通うのである。この調子で進めば、学校の英語は必要でないことになるだろう。(成田成寿「戦後の英語教育とこれからの課題」英語教育1971年12月号)

「外国語を学んで得られる頭脳訓練とか、英米人のものの考え方に接するのとか、英文学を通じて人生を学んだり教養を身につけるとか、いろいろ言えるけれども現状ではあまりにそらぞらしい。「英語を通じて教養を」なんてことは、何十万人のうち何人がやっているか。英語教育はこれまでほとんど必修で、意欲も能力もない者に無理にやらせて教師も苦しみ生徒も苦しんで、結果は無意味に近い例が多かった。」(羽田三郎「技能なくては元も子もない」英語教育1971年12月号)

b. 「役に立つ」とは「教養を深め、人間形成に役立つ」ことである。

「習った英語は、一生のうち一度も使わなくとも、あるいは全部忘れてしまっても、それでけっこう役に立っている。外国語を知らない国民は、母国語による考え方が唯一真実の考え方であるという無意識的、独善主義に基づいて行動する。外国語を知り、異国文化と自国文化との相違が認識できれば、考え方も柔軟になり、環境順応にも弾力性ができる。(柴田徹士「英語教育における俗説と偏見」英語教育1975年正月号)

「外国語教育の目的は、文法の正確さと読みの深さを訓練すること、秀れた文章を暗誦させることを通じて国語教育の欠を補い、言語一般に対する文化感覚のようなものを育成することにあると思う。そのためには、私はすぐに「役に立つ」ことを狙う必要はないように思える。そればかりか、言語教育はすぐ結果の出ない息の長いもので、むしろ「役に立たない」ものへの情熱によって支えられるべきものであろう。…中略…「言語に対する鋭敏さ」という目に見えない文化的触角を目ざめさせることが本来の外国語教育であって、学校が引受けるのはその部分であろう。(西尾幹二「実用外国語を教えざるの弁」英語青年1972年5月号)

「学校教育全体の中で、英語という教科でなければ不可能な子供の発達の側面を考えて見れば、英語というひとつの代表的な外国語を学ぶことによって、日常

は日本語で行なわれている子どもの言語生活全体をひろげ、豊かにしてゆくこと、つまり単なる知識や技能の修得でなく、言語にかかわる思考や感性を育ててゆくことが浮かびあがってくる。いや思考や感性を育ててゆくことが、知識や技能を本当に身につけることなのであるて、両者は切り離された別の事柄でない。そしてこのような思考や感性は、言葉のもつ深みや美しさを味わいながらその内容をひろげ、考えてゆく学習によって養われるのである。（大浦暁生「内容の学習でみがく思考と感性」英語教育1975年4月号）

C. 「役に立つ」とは、「基礎力を身につける」ことである。

「一般に実用英語というと、「話す」とことと「書く」ことを意味するが、私は「話す」ことは慣れの問題であって、本質的には教室では教えるべきものではないと思う。また教えても、それ程効果はない。会話の力を身につけることは、もちろん望ましいが、私は学校においては、社会に出てからすぐ右から左へ役立つような英語でなく、短期間の実地訓練ですぐ役立つような英語の基礎をきずくべきだと思う。実用英語 production 「運用」面の英語を重視するならば、教室で訓練すべきは英文を作る力であると思う。」（小川芳男「大学の英語教育(1)訓練の問題」英語青年1965年8月号）

「いま問題になっている「役に立つ」ということは、実社会に出て社会生活を営む上に、また自己の職業の上で「役に立つ」英語の活用能力を、どの程度身につけ得たかという見地から見ているようである。しかし英語を学ぶことによって国際理解と協調の精神を養うことはよく云われますが、ただ通ずればよいという安びかの英語運用能力の養成からは、ねらいと逆の結果が生じて来ます。

中略……したがって卒業した生徒がどんな分野に進もうと、自分の立場や職業の上で要求される「役に立つ英語の能力」を習得できるだけの下地、すなわち基礎能力を身につけていたらそれでよいという考え方もできわめないだろうか。」（戸田豊「教育にとって役に立つとは何か」英語教育1975年4月号）

その3 英語教育が「実用的」でなくなる理由

a. 日本人が英語に弱い理由

英語を母国語としない国の中で、日本ほど英語を学校教育に採り入れている国はないといわれています。中学・高校・大学と延べ10年間にわたって学習しても実用

にならないとはどういうことでしょうか。そもそも実用英語に対し教養英語というものがあるわけでもないし、英語の学習は、実用にもなると同時に教養を高める効果があるべきものです。ところが実際にそうならないとすれば、教育方法に欠陥があるのか、国民性によるものなのか、あるいはそのほかに理由があるのでしょうか。これについては、言語構造のちがひ、島国という地理的条件などが常識的に言われますが、次の3つの事情がより大きく影響していると思われます。

「まず第1に日本人は完全主義とも言える国民性の側面をもっており、文法過重視、重箱の隅をつつくような潔癖さ、さ細な問題を気にする小心翼翼さなどのために、使って失敗するより黙っていようとする傾向があります。」（朱牟田夏雄「戦後の英語教育と今後の展望」英語教育1971年12月号）

「第2に、明治のはじめに、非常な勢いで英語の学習が普及した当時は、徳川300年の鎖国で、欧米諸国に文化的に非常に遅れていたのを取り戻すために、知識の輸入に精力が集中された。したがって、まず読むことに重点がおかれ、過去の英語教育の主流となってきたのである。」（飯野至誠「英語の教育 変遷と実践」

「第3は、日本の社会がモノ言語構造であることである。後進諸国においては、植民地としての歴史的背景、多言語多民族の人口構造のため、英語かフランス語を公用語としている関係で、英語を自由に使えなければ知性人としての地位を保つことができないのである。日本人は、ほとんどの人達が外国語をさほど緊急に必要としないで十分に外国の事情にも通じ、世界の大勢に遅れないで生きていける珍しい条件を育てあげた特異な国民であって、日本人の会話能力が低いのもこの点に大きな原因があると思われる。」（西尾幹二 前掲書）

終戦による進駐軍の駐留・「話せる英語」への学習の転換、海外旅行の普及などが刺激となって、日本人の会話能力は戦前に比較してかなり進歩したようである。しかしやはり英語教育に費やされる時間・労力に比較して、いわゆる「実用的」な効果が期待した程あらわれないのは、以上の事情、とくに第3の理由によることが大きいと思われる。また次の話しもこのへんのいきさつを物語るものとして面白い。

「米国の国際開発機構（A I D）が、開発途上国から留学生を米国その他に派遣するについて、英語教育を行っている。米国にある集中英語講座（I E P）—教師が直接学生を指導する授業時間数が週20時間以上の場合—に入れば効果があがることはわかっているが、費用がたいへん高くなるのでそれぞれの国でIEPを始めた。

ところが、いくら力を入れても期待した効果があがらない。授業時間、授業形態、教材などを、米国のIEPと同一にし、教師も経験のある米人を使っているのに思わしくない。調査の結果、同国人ばかりのクラスなので、学生がすぐ自国語に頼ろうとするし、いったん教室を出たら、周囲は自国語ばかりなので成果があがらないことがわかり、今では米国へ送ってから言語訓練をするように変えたということである。」（今村茂男「国際感覚と英語教育」1973年5月 E L E C出版社）

b. 入試英語の問題

平泉試案でも、また産業界からも、わが国の英語教育を「非実用的」なものにする最大の原因として、非難のまとなっているのが受験英語であります。つまり英語は、単に「受験用の必要悪」に過ぎず、「受験英語」が、健全な英語を伸ばす上での諸悪の根源であるときおろされ、試案では、「高校・大学の入試には、英語を課さない」の1項目が設けられています。現在の高校の英語教育が、大学入試の影響を深く受けていることと、過去における出題が「読み」「書く」英語に偏っていたことは事実であります。したがって、英語を入試科目から外して、「聞き」「話す」英語を大副に学習に採り入れるならば、英語がより「実用的」になるだろうとは考えられます。しかしそれによって、前章で検討したような、ほんとうの意味で「役に立つ」英語の教育が可能になるかどうかは疑問であります。それは単なる会話の段階の学習では、とうてい到達できない深みのあるものであり、そこでは、一見時間と労力の無駄な浪費と思われるようでも、語いの蓄積とそのための激しい訓練が不可欠であります。「勉強に王者の道なし」のたとえ通り、確乎たる目的に向かつての絶えざる孤独な研さんが絶対必要です。もし受験英語にメリットがあるとするならば、具体的な努力の目標を提供することにあると思います。いま確実に言えることは、英語を入試科目から外すならば、高校生の英語学習に対する熱度が失われ、総体的に英語の力の水準が低下し、英語がかえって役に立たなくなるということです。したがって、今後採るべき改善の方策は、受験英語のメリットを生かし、デメリットを除くことでありましょう。「受験英語の程度が高すぎる」「古い英語や、不自然な英語が多い」などと入試英語問題の欠陥については、すでに英語教育界内部においても批判のあるところですが、なかなか改められない実情です。これからの入試問題は、高等学校の教科内容を十分に把握し、対象者を念頭に置き難易度を検討して問題を作ること、また一部の大学ですでに実施している hearing

やdictation を加えることなどの改善が必要です。それによって受験英語のデメリットが除かれ、試案の言う「役に立つ」英語の実現の方向に沿うことが可能となりましょう。（三浦新市「役に立たないから入試から外すのか」英語教育1975年4月号）

その4 平泉試案と実用英語について考える

a. 平泉試案と英語無用論

平泉試案には、「わが国民の5%が外国語、主として英語の実際的能力を持つことが望ましい」という項目があるが、これは新しい形の英語無用論に思われます。英語無用論は、戦時中の敵性語排撃というヒステリックなものを別としても、かなり長い歴史をもっています。大岡育造（元文部大臣）、杉村楚人冠、戸川秋骨などの諸氏が、それぞれ無用論を唱えましたが、その論旨の1つに「英語教育は効果があがらないので無駄である」というのがあります。平泉試案も同じ趣旨ですが、効果があがらないからと言って切り捨ててよいかどうか一応検討する余地があるように思います。

現在、われわれが生活する周囲は、英語によって取り巻かれており、英語を知らなくては、日常生活の円滑な維持進行が不可能ではないかとさえ思われる程です。ちょっと考えただけでも、商品の名前、レッテル、広告、テレビ・ラジオのコマーシャル、電気製品、機械の記号、仕様書その他枚挙にいとまないほどです。婦人雑誌のファッションの解説など、英語を、て・に・を・はでつないだような感がします。また英語の通用範囲は、第二次大戦を契機として飛躍的に増加し、現在は第2語学として通用するものを含めると、6億以上であるといわれる。外交語は、かつてはフランス語ときまっていたが、現在では英語の方が優勢である。医学語でも、英語がドイツ語に代わって使用されている。貿易、商業の部門では従来から英語がもっぱら用いられていたが、わが国が貿易立国を国是としているため、商圏の拡大と相まって英語に対する需要がますます高まっている。（上野景福「英語の国際性」英語教育1971年1月号）

また英語を学習する観点からすると、中学・高校在学中に、能力の問題や学習する意志の無いことから英語の授業を受けなかった者が、社会に出てからなにかの事情で、英語にかかわり合いを持つようになるかも知れません。現在のように、海外旅行が自由な時代ではなおさらであります。将来必要になった時に学習するという

考え方もありますが、語学の勉強には時機があつて、記憶力の旺盛なティーンエージャーの年齢の時がもっとも適しています。また一度学んで忘れたのと、全然やらなかったのでは、大きなハンデがあります。

以上の検討によって明らかなとおり平泉試案の英語能力者5%論は、わが国民の環境と学習適齢期を無視し、国民の大部分を英語から切り捨てようとするものであつてあまり実用にこだわつて現実を無視したものではないでしょうか。

b. 学校教育と実用英語

英語を学ぶ効用について3つの考え方があることがわかりましたが、そもそも学校で外国語を学ぶ目的は为什么呢。もしも、英語を「聞き」「話す」能力を会得することをもって学習の最終目標とするならば、かならずしも学校でやる必要はありません。街の英語塾・通信教育・テレビ・ラジオの講座でも事足りる筈です。したがつて、学校で英語を学ぶということには、それ以外では達成できない学校教育の一面としての意義が認められなければなりません。ここでは「学校教育の目的は何か」などと議論する余裕はありませんが、ただ言えることは、それが全人的教育に関係をもっていて、正しい判断力、公正な批判精神、個性的な創造力などの育成にもとづく、人間性の向上を最終目標となすべきものであつて、学校教育の真の意義がここにあるということです。もちろん学校教育でも実用性を強調する面がないわけではなく、職業高校における職業科目は、とうぜん実用性が主な目標となります。しかし国語、数学、英語などの基礎科目は、どうしても実用性が従となります。実用性という面から見れば、これらの科目の学習は、一見無駄なように思われますが、それはそれなりの意義があるはずです。たとえば、頭脳をしなやかにするための訓練とでも言えましょうか。私自身の経験から言つても、学生時代にあれ程苦しんだ数学から、実社会に出てから恩恵を受けた記憶はまずありません。数に関係した科目の中で、一番「役に立った」のはそろばんです。しかし、それはそれとして、私の人間形成に数学が何か役立っていることは確かでしょう。ただ現在ではあまりに実社会と学校が密接に関係づけて考えられており、学校教育の本義が人間教育にあることがなござりにされて、学校は就職のための道具として考えられているようです。したがつて、社会（とくに産業界）も学校教育に実用性を求め、学生もすぐ「役立つ」ものを身につけようとします。日本人は、国民性から言つても、

性急に黒か白か決めてしまう傾向があるが、教育というものは、たいへん息の長い性質のもので、もっと長い目で見ることがあろうかと思います。

だいたい実用英語と教養英語を区別することがおかしいのではないのでしょうか。教養を離れた実用は、真の実用になりません。伝達するのは言葉ではなく、その内容だからです。時候の挨拶、簡単な質問の受け答え、茶飲み話程度なら、いわゆる実用英語で間に合うかも知れませんが、それ以上には話が進まないでしょう。すこしでも内容の高い話や、こみ入った話、専門的な内容になると、物を言うのは言葉の能力でなく知識や教養です。もちろん、そうだからと言って、実用を無視してよいというものではありません。せつかくの知識や教養も、うまく発表する技術、能力がなければ「役に立たない」でしょう。実用英語といい教養英語といっても、1つのものを、ちがった角度から見た言いまわしに過ぎないのに、別のもののようになってしまったのは、学習法の欠陥もさることながら、わが国の社会が英語を緊急に必要としない特殊事情によるところが大きいと思われます。

その5 私の体験

私はここで、この原稿を書くきっかけとなった1つの出来ごとについて紹介しようと思います。昨年(昭和49年)4月中旬から約50日間、私の家内はローマに滞在しました。それはローマの日本大使館に勤務している義弟一家が、自動車事故にあり、一家全員が入院するという突発事件が起きたためでした。観光旅行であれば、事前にある程度の予備知識を仕入れ、片言の日常会話ができるくらいの準備もできますが、なにぶん緊急のことなので、とるものもとらずにあえず出かけてしまいました。言葉は不自由だし、風俗習慣のちがう土地で、どんなふうに通じているか心配していました。幸い子供は軽傷で3~4日で退院しましたが、義弟は重傷、妹は重傷で子供の世話をするために予想以上の長期滞在となってしまいました。さて帰って来てからの話ですが、マーケットへ行く時には、中学1年生のおいが一諸に行き、彼の片言のイタリア語で買物をすませたが、1人で病院へ行く時や、いくらか余裕ができて、ローマ市内やフィレンツェなどを見物する時は、即席のイタリア語と女学校時代に習った英語を使ってどうにか間に合ったということでした。イタリア語にしろ、英語にしろ、なんとか使って、こちらの意志を通じさせないことには、生活していけないわけですから、当人も夢中だったと思います。「こちらに、なんとし

でも相手にわからせようとする意志と、相手が、こちらの言うことを理解しようとする親切心があれば、最後はどうにかなるもの」というのが彼女の結論ですが、生活がかかっているということが、他のなによりも、外国語を使えるようになるための条件のようです。ただこの時、私が深く印象づけられたのは、家内の英語が通じたということです。私事にわたって恐縮ですが、彼女は戦争中から戦後の混乱した時代に、旧制の高等女学校の生徒でしたので、戦時徴用のため十分な授業も受けられず、まして英語は「敵性語排撃」の方針で殆んど学習の機会がありませんでした。いくらかともに英語の授業を受けたのは、終戦になってからの2年間だけだったということです。彼女と英語とのかかわり合いは、英文タイプの学校へ通ったことや、商社で約2年間タイプを打ったことなどで続けましたが、その後主婦業に永久就職したために、完全に縁が切れてしまいました。それ以来約23～4年のブランクがあったわけですが、むかし女学校時代に習った英語が役に立ったというのです。私はこの時ほど教育の価値・効用というかと、教師の責任について深く感じたことはありませんでした。

卒直に言って、中学卒業生の90%以上が高校に進学する現状では、かなり学力の貧しい者が高校に入って来ます。高校生の多様化と言えば体裁は良いが、玉石混こうが実際です。中学3年間に、英語の基礎的な力を、ほんんど身につけ得なかった生徒が相当数おります。そうした生徒に対して反応のない授業をする時ほど、教師として無力感を覚えることはありません。どうしたら授業に興味をもたせて、学習意欲を起こさせることができるかと、自分なりに努力工夫しても、効果はさっぱりありません。「何のために英語をやるのか、英語の学習を受ける必要があるのだろうか、英語なんかやめてしまって、別の実用的な科目をやった方がよいのではないか、何かお互に無駄なことのために骨をおっているのではなからうか、」と思ひ悩むこともしょつちゅうでした。しかしその時を境いにして、私の考え方が大きく変わりました。「いつ、どういう事情で、生徒が卒業してから、英語を使わなくてはならないことになるかも知れない。その時彼らが、「高校時代に英語をやっていて良かった」と思う（あるいは、たいへん可能性が少ないかも知れないが）ように、自分の最善をつくさなければならない」と思うようになりました。

もしも教育が、素質があり、はじめから興味のある生徒ばかりを対象として行なわれるならば、たいへん能率のよいことは分かりきった事です。教師も楽で

あり、生徒の進歩も早く、国家的にも無駄な失費が節約できて能率的でありましょう。しかし教育とはそういうものではないと思います。「物を作る」のなら、最も能率的で有利な方法を探らなければならないが、教育が「人を作る」ものである以上、たとえ非能率とわかっていても、あるいは将来それによってメリットが期待されない場合でも、通るべき道は通らなければならないと信じます。

その6 むすび—私の夢

平泉試案は大きな論議を呼びおこしましたが、それが契機となって「中学校、および高等学校の英語教育改善に関する調査研究協力者会議」が設けられ、この6月19日（昭和50年）に結論ともいべき改善方法についての提言が永井文部大臣に対しなされました。ごく簡単に紹介すると、目標として次の3つをあげています。

1. 学校教育の目的からして、学校教育全体の改善と、他教科との関連のもとに改善を進める。
2. 基礎の習熟と広い視野と豊かな教養を培う基盤とする。
3. 当初は、できるだけ生徒に学習の機会を与えるが、漸次生徒の能力、適性、進路に応じた学習ができるようにするとともに、実用性も考慮する。

その具体的方策として

1. 教育研修の充実
2. 高校における英語科の設置
3. 指導法の工夫
4. 教材機器の整備

を勧めています。

なお付帯意見として

1. 英語教員養成大学における、実用能力に優れた教員を養成する問題
2. 大学入試英語と高校英語との関連 についても言及しております。

英語教育界が現在かかえている、いろいろな問題を具体的にに取り上げて、その改善方法を総合したもので、今後の英語教育の方向を決定するものとして高く評価されましょう。しかし、いままでに教育の問題についてなされた、たくさんの提言、提案が実現されずに、机上の作文で終わった例がたいへん多いようです。予算の関係、過去の慣行からする拒否反応、その他いろいろな原因があると思いますが、今

度こそは、この答申の中で、すぐにでも実行できるものからでも着手して、わが国の英語教育の改善が軌道に乗るようになってもらいたいと思います。さもなければ、何年か、あるいは何十年か後に、また同じような不毛な議論が繰返されることになるでしょう。

ところで私は、テレビ中継で国際会議の同時通訳を見聞するたびに、科学の発達した現在、機械によってそれができないだろうかと思うのです。あるいは、私にその方面の知識が無いための空想かも知れませんが、識者から荒唐無稽の指摘を受けるかも知れません。しかし、ここ20年あるいは10年間のコンピュータの発達、電子工学の進歩を考えるならばまったく見込みが無いようには思われません。1946年に A. Booth は「電子計算機は、翻訳の仕事に役立つであろう」と提案しており、以来アメリカ・ソ連・フランスを始めわが国でも機械翻訳の基礎研究と試みがなされつつ今日に到っています。（機械翻訳の言語学への貢献 小笠原林樹 英語教育1965年10月号）

ただ現在の段階では、ことばとことばを翻訳することは無理で、文字と文字のトランスレイション、それも中学校のリーダー程度のもので成功しているようであります。（機械翻訳の一つの試み 伊東正安 前掲書）このためには、プログラミングに先立って、文の構成についての文法、大きな語類の中のいわゆるサブクラスのもとづく文法、文の認識のための文法、文の生成のための文法などについての分析のプロセスが必要です。しかしプログラミングの技術が向上し、コンピューターも更に優秀な性能のものができるならば、より高級な翻訳が可能となりましょう。また一遍に音声対音声の翻訳に進むことが無理であっても、機械が音声聞いてそれを翻訳し、文字で表わす段階を経て、やがては最終の同時通訳も不可能ではなくなると思われます。勿論これには、ことばを組立てる音声についての徹底的な分析がプログラミングのために行なわれなければなりませんし、また、あまり学術的、専門的なものは無理で簡単な日常会話程度のものになります。また機械も最初は研究室用の大型のものから、次第に小型化して、ポータブルに、価格も漸次低下して普及に適するものとなりましょう。海外に出かける際に持って行けば、英語コンプレックスに悩まされることなく旅行を楽しむことができましょう。

ロンドンエコノミスト編集局次長ノーマン・マックレイは、Pacific Century という論文で、今後は大平洋—日本の世紀であると予想し、その根拠としてテレビ

の技術をあげています。日本のエレクトロニクスの技術は世界に誇るものであってそれに対応する文化を築きあげることによって、世界へ進出することができるだろうと言っています。（中山伊知郎 貿易立国の将来 如水会会報1976年1月号）

素人の私にはよく分かりませんが、日本の技術がそれ程優秀なものであるならば、是非この方面に着眼して会話翻訳機の実現に進んでももらいたいと思います。最近の電卓計算機の普及は、それが教育的に良いか悪いかは別にして、学生や生徒から計算のわづらわしさを除いてくれました。もしも将来実用的な会話翻訳機が開発されるならば、われわれ日本人は、外国語教育における最大の弱点—聞き、話すことから解放され、読み書くことに専念できて、語学教育はさらに進歩すると思います。—これが私の夢です。